

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6 月 25 日現在

機関番号：32693

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11527

研究課題名(和文)看護学実習において学生のコミュニケーション能力を育成するための指導モデルの開発

研究課題名(英文)Development of a teaching model to nurture students' communication skills in nursing practicum

研究代表者

鷹野 朋実 (TAKANO, TOMOMI)

日本赤十字看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：00409799

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、看護学生のコミュニケーション能力向上のための教育実践として、実習指導モデルの構築を図ることである。

本研究では、看護師養成機関で実習指導を担当している教員12名に対する面接調査で、実習指導で学生のコミュニケーション能力に問題があると感じた場面データを収集し、困難さの要因を抽出後、その特性が酷似している発達障害学生に関する教育理論を活用し、教員の実習指導場面における具体的留意点を導き出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、若者のコミュニケーション能力低下は社会問題となっている。看護師にとって、患者及び医療スタッフとの円滑なコミュニケーションは看護援助の基盤であり、文部科学省もコミュニケーション能力向上を図る看護教育の必要性を強調している。

本研究では、看護教員が、学生のコミュニケーションの問題で実習指導に苦慮した事例から、指導の困難さの具体的要因を抽出した。そして、全ての事例に、学生たちの「主体性の乏しさ」「成熟しない自己愛、不健康な自己愛」の存在が考えられることに着目し、学生のコミュニケーション能力育成の指導モデルの第一段階として、基盤能力の感情知性育成の重要性、効果的と考えられる実習指導法を提言した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to create a teaching model to be used in nursing practicums as an educational practice to improve nursing students' capability in communication. Based on interviews with 12 faculty members who are in charge of practicums at nursing training institutes, scenes where they realized students' communication to be problematic were collected as data. Factors of difficulty felt by the students were identified and analyzed, which proved to be extremely similar to those of students with developmental disorders. Educational theories about students with developmental disorders, therefore, were applied to draw out specific points to note in nursing practicums for faculty members who would provide guidance to such students with poor communication skills.

研究分野：精神保健看護学

キーワード：看護学生 コミュニケーション能力 看護学実習 発達障害の特性 実習指導

1. 研究開始当初の背景

近年、他者とのコミュニケーションがうまくとれない大学生が増えていると言われている。看護師を志す学生においても、コミュニケーションスキルの低下が指摘されており、看護教育の現場では、その指導に苦慮している。対人職種である看護師には、高度なコミュニケーション能力は必要不可欠であり、コミュニケーションに問題を抱える学生たちのコミュニケーション能力育成は、現在の看護教育が取り組まなければならない最重要課題の1つである。

2. 研究の目的

看護教育において、コミュニケーション能力が不十分な学生の能力向上をはかるため、具体的な実習指導モデルの定式化と、実習指導モデルのプロトコル作成開発の基盤の構築を目指すことが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) データ収集方法：看護系大学・看護専門学校で実習指導を担当している看護教員（実習指導経験3年以上）12名を対象として面接調査を実施し、実習指導場面で看護学生のコミュニケーション能力に問題を感じ、かかわりに苦慮した場面の語りを音声データとして収集した。

(2) データ分析方法：音声データから逐語録を作成し、繰り返し読み込み、質的分析を行った。まず、各事例の内容を詳細に検討した後、カテゴリーを抽出し、その特徴を明らかにし、そこから具体的な実習指導の方法を導き出した。分析にあたり適宜、看護学、教育学、発達障害看護、精神医学、児童精神医学それぞれの専門家からのスーパーバイズを受けたほか、看護教員及び実習指導に携わる臨床看護師（いずれも経験3年以上）で構成するワーキンググループ（構成メンバー3～5名）での事例分析を3回実施し、データ分析の信頼性・妥当性の確保をはかった。

(3) 倫理的配慮：日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認の後に研究に着手した（研倫審委第2015-3）。面接調査の対象者は自由意思に基づき同意が得られた者のみとし、個人情報・研究データは保管を厳重に行い、データは本研究活動のみに使用した。本研究における利益相反はない。

4. 研究成果

研究結果から、教員の体験した困難事例から【様々な身体症状を訴える学生への対処の難しさ】【アプローチを工夫しても頑なに「患者のことはわからない」と言い続ける学生に感じた不全感】【教員としての思いが伝わっていかないもどかしさ】【実習終了後に「先生にもっとかまってほしかった」と言った学生に感じた困惑】【「わかりました」と言うが全く理解できていないことへの苛立ち】【「私、記憶がとんじやったりする」という学生との関わりの体験】【同じ言葉を連発する声かけで患者を怒らせた学生に感じた違和感】【関わりの糸口が見つけれられない焦り】【教員としてのモチベーションがあがらない辛さ】の9個のカテゴリーが抽出された。

さらに、これらのカテゴリーにより浮き彫りになった学生たちのコミュニケーションの様相が、発達障害者のコミュニケーションの特徴と酷似していることに着目し、考察を行った。その結果、コミュニケーション能力に乏しい学生たちの具体的特徴として、①ストレスから生じる身体化、②言葉を文字通りに受け取ってしまう、③場の空気が読めないため、周囲から浮いてしまう、④臨機応変な対応や融通を利かすことが難しい、⑤段取りをすることが苦手である、⑥メモや記録がとれない・活用できない、⑦助けを求めない、もしくは助けを疎んじているように見える、⑧自分の見た景色でしか、ものが見えない、という8つが明らかになった。さらに学生たちのこれらの特徴の根底には、「主体性の乏しさ」「成熟しない自己愛、不健康な自己愛」が存在する可能性が高いことが示唆された。

上記の研究結果から、具体的な実習指導として、感情に関する力（感情知性、エモーショナル・リテラシー）を育む教育の必要性、実習指導場面における教員のかかわり方における具体的留意点として、「文脈をよみとることを意識してかかわる」「かかわりにおいて重要な基本的姿勢」を明示するに至った。

「文脈をよみとることを意識してかかわる」ということは、事例における学生たちが文脈を読みとることが十分にできていないことに着目して導きだしたかかわり方の基本である。これは、発達に不均衡がある発達障害者にみられることが多い、文脈をよみとることが苦手であるという特徴に類似している。具体的には、「実習記録が書けない」「自分自身の患者とのかかわりをエピソードとして再構成できず、断片的な記憶を浮かぶままに書く」といった事態は、学生が自分自身の課題や問題点を振り返ることを困難にしていた。このため、教員は、学生たちが自分自身の文脈を読みとることが出来るようにかかわっていくことが必要となる。実際、教員が学生と一緒に患者とのコミュニケーション場面を振り返るという作業を行った事例では、学生は、完成した記録から自分自身のかかわりの問題点を探ることができ、さらには「私、どうも記憶がなくなっちゃうとか、とんじやったりするみたい」という自分自身への気づきを生み、これが、記録が書けずにイライラして他学生に八つ当たりしてしまう、という言動を激減させることにもつながっていた。学生自身が、自分自身に起こっていた出来事を文脈の中で振り返り、体験をなぞる機会を重ねるリフレクションは、自ら文脈を読みとることができるようになるために必要な学生の内的体験を引き出すための重要なポイントになっていた。

‘かかわりにおいて重要な基本的な姿勢’は、さらに詳細に9項目にわけ、具体的な関わり方法を示した。この9項目について、以下に簡単に記す。

① ‘まずは受けとめる’ことを心がける

受けとめるべきは、学生たちの様々な感情であり、彼らの要求ではない。まずは彼らの思い、要求を言葉で表出させることが重要である。それと、教員は彼らの言動の問題に目を向けがちであるが、問題よりも学生自身の困惑、彼らを感じている他者への違和感などに目を向ける姿勢が大切である。

② 記憶ファイルが蓄積できるようにサポートする

発達障害者における発達の不均衡でみられるように、実習場面において学生たちは、同一性保持やイメージネーション力不足をまねきやすく、想定外の類推や臨機応変な対応を困難にしていた。しかし、これは言い換えれば、想定内の範囲内であれば対応が可能、ということである。想定外のことは、経験することにより、それ以降は想定内のことに変化させることができる。つまり、想定パターンが蓄積されることにより、様々な場面で適切な対応ができるようになっていくととらえることが大切である。

想定外の出来事への学生たちの不適切な対応については、教員は感情的にならないように心がけて、事後に学生とともに振り返り、今後に有用な記憶ファイルとして蓄積できるようにかかわることが重要である。

③ ミスは責めずに、その原因について学生と一緒に振り返る

事前の指導や注意喚起にもかかわらず学生が失敗する、何度も同じ失敗を繰り返す、という事態が生じた時には、学生がどうしてそうになってしまうのか、その理由を学生とともに振り返ることから始めることが大切である。複数の学生に対する注意や指導を自分に向けられたものではないと受け取る学生、注意喚起を自分への否定、侮辱のように感じとり反発する学生もいる。また、教員の伝え方に問題がある場合もある。教員は「何度も言っているのに、どうしてわからないのか」と感情的になりがちなので注意する必要がある。

④ 集中力が続かない場合、メリハリをつけられるように工夫する

ケアレスミスが目立つ場合は、まずはそれが気持ちの問題なのか、記憶に問題があるのか、それとも集中力が持続しないからなのかなど、原因を見極める必要がある。注意力や集中力に問題がある場合は、例えば、教員は実習における1日の行動計画を学生と一緒に立案することも必要かもしれない。そして、その際には適宜、学生が息抜きできる時間や休憩する時間を組み込むようにして、集中しなければいけない場面と、リラックスしてもよい場面のメリハリを学生がつけられるようにサポートする。集中力がないと思われる学生は、常に集中し続けなければならないと思っているために、早々に疲弊してしまっているということも多い。

⑤ 自己否定感を見直すためのフォロー

一見、傲慢に、もしくは自己中心的に見える学生たちは、実は不安や緊張が高く、本来は低い自己評価、自己否定感をもっていることが多い。彼らへの対応においては‘ほめる’ということが重要であり、彼らの特性を、例えば、「こだわり→集中できる」「落ち着きがない→すぐに行動する積極性」といったふうに、特性の良い面を肯定する形でとらえ直しをし、彼らと接していくことが、彼らの自己肯定感を育み、不安や緊張を低下させることにつながる。

⑥ 失敗から学ぶことが苦手な学生もいる

教育においては、失敗からの学びは重要であるとされているが、コミュニケーション能力が乏しい学生は失敗から学ぶことが苦手な傾向にある。

コミュニケーション能力の乏しさは、‘成熟しない自己愛、不健康な自己愛’が基盤にあることが多いため、失敗時の教員の指導を、自己が脅かされる挫折体験や迫害体験としてとらえがちな傾向にある。そして、その後は失敗をこわがるあまり、新たなことに立ち向かえなくなる危険性も孕んでいる。失敗から学べない学生たちに対しては、特に丁寧に、なぜ失敗したのかを一緒に振り返り、本人がそれを理解できるようにサポートすることが重要である。

⑦ わかりやすく、具体的に伝える

‘わかりやすく伝える’ということは、学生が本人なりの的外れな解釈をしてしまうような言い方を避けることが、最も大切である。例えば、「○○してほしいのだけれども」とか「○○した方がいいかも」といった遠回しの言い方ではなく、「○○しましょう」「○○して下さい」とはっきりと伝えることを心がける。また、叱る時にはくどくどした言い方ではなく端的な言葉で伝える、通常は言葉にして伝えることがないような暗黙のルールについても、言葉で簡潔に伝えて確認する、という配慮も忘れてはならない。

⑧ 気持ちで寄り添う

コミュニケーション能力が不十分な学生とのコミュニケーションは、教員を不快な気分にさせてしまうことも多い。本研究においても教員に対して「かまってほしいけれども、干渉されたくない」といったアンビバレントな気持ちを抱いている学生たちもいて、教員たちが気持ちで寄り添うことを困難にしていた。彼らと気持ちで寄り添う上で重要なことは、彼らとのかかわりの中で生じた自分自身の気持ちを率直に学生に伝えていくことである。学生たちのネガティブな語句を被害的に受けとめがちな傾向に留意すると、被害的にさせない伝え方のコツは、主語を入れて「私は、あなたに○○と言われて、ちょっと悲しかった」のように表現することである。

⑨ ‘スモールステップで少しずつステップアップ’ のサポートをする

学生が達成すべき実習での目標について、目標達成に至るまでの行動を段階的に細分化したスモールステップを設定し、順次、ステップを攻略できたら達成感が得られるような工夫をする。このスモールステップを積み重ねながら目標達成していくという方法は、教員にとっても、適宜、学生の達成をほめ、一緒に喜ぶことが無理なくできるため、教員、学生両者にとって効果的手法といえる。

最後に、上記のような教育的かかわりを行っていくためには、教育を実践する教員へのサポート体制が必要不可欠であることを提言した。それは、上記に述べた具体的かかわりを実践するプロセスにおいて、「学生をどこまで受けとめればよいかわからない」「いろいろやってみても、やはりわかってもらえない」「突如、攻撃されてしまった」などの悩みを教員が体験することが容易に想像されるからである。また、コミュニケーション能力の問題は、実習場で、教員が予想もしていなかった状況を引き起こす。教員がかかわる上での難しさだけではなく、患者や患者家族を怒らせてしまう、実習指導者を困惑させるといった事態につながることも多く、教員一人の手には負えないほどの深刻な事態にもつながりかねないということが、今回の研究からも明らかになった。

また、今回の研究結果から、実習場に出ている教員はリアルタイムで上司や同僚と相談できない状況に置かれている事実も明らかになった。実習指導中の教員へのサポート体制を充実させることは、実習指導の場においてコミュニケーション能力育成のための教育を行うためには急務の課題と言える。本研究の面接調査においても、実習を担当する教員たちのデブリーフィングセッションのような場を実習期間に組み込むべき、という発言があった。教育にあたる教員たちの精神的疲弊の予防、心身のコンディションを整えるサポート体制の確立は、効果的な実習指導を展開していくために、重要な支援と言えるだろう。

今後の展望として、看護教育におけるコミュニケーション能力が不十分な学生の能力向上をはかる有用な実習指導モデルのプロトコル作成には、以下のような研究を行うことが必須であると考えられる。それは、実習指導場面について参加観察法を用いたデータ収集を行い、その場面を体験した教員、学生の両者に面接調査を行い、それぞれの思いや考え、困り事を明確にしていく事例分析の蓄積をはかる研究である。本研究は、あくまでも教員が感じていた学生のコミュニケーション能力に関係した実習時の困難さであり、教育を享受する学生の思いや彼ら自身が自覚している困難さについては明らかにされていない。教育が教員と学生の相互作用による営みであることを考えると、実際の実習場面について客観的観察データを収集すること、教員のみならずもう一人の当事者である学生の体験もあわせて明らかにすることが重要であるということ、本研究のデータ分析を行いながら実感し、この視点からのアプローチの欠如が、本研究の限界であると痛感した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計1件）

鷹野 朋実、看護学実習における‘学生のコミュニケーション’に焦点をあてた文献を対象とした文献検討を行って、日本精神科看護学術集会誌、査読有、60巻、2018、119-123

〔学会発表〕（計2件）

鷹野 朋実、看護教員が実習指導においてコミュニケーションに困難さを感じた学生との関わり、第26回日本精神科看護専門学術集会、2019 2019年12月開催の学術集会での発表確定

鷹野 朋実、看護学実習における‘学生のコミュニケーション’に焦点をあてた文献を対象とした文献検討を行って、第24回日本精神科看護専門学術集会、2017

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：滝川 一廣
ローマ字氏名：(TAKIKAWA, kazuhiko)

研究協力者氏名：武井 麻子
ローマ字氏名：(TAKEI, asako)

研究協力者氏名：末安 民生
ローマ字氏名：(SUEYASU, tamio)

研究協力者氏名：白石 弘巳
ローマ字氏名：(SHIRAIISHI, hiromi)

研究協力者氏名：有元 典文
ローマ字氏名：(ARIMOTO, norifumi)